

羽咋市吉崎・次場遺跡出土の土製鋳型外枠について

林 大智

はじめに

平成11(1999)年10月、弥生時代の拠点集落である羽咋市吉崎・次場遺跡から、銅鐸の土製鋳型外枠が出土していたことについて記者発表が行われた。従来、石川県は銅鐸文化圏外の地域として捉えられてきたため、この事実は県内外の研究者に、大きな驚きをもたらしたことと思われる。しかし、この土製鋳型外枠自身は、昭和54(1979)年および昭和59(1984)年の発掘調査によってすでに出土していたものであり、報告書にもその実測図が掲載されている⁽¹⁾。「石川で青銅器(銅鐸)の鋳型が出るわけがない。」という研究者の思いこみと、発見当時、他に土製鋳型外枠として認識できる資料が極めて少なかったことが、この資料を長い間倉庫の片隅に追いやる原因となった。ただ一部の研究者のみは、当時からこの資料が土製鋳型外枠である可能性を示唆していた。

平成8(1996)年、奈良県唐古・鍵遺跡の第61次発掘調査によって、多数の土製鋳型外枠が出土し、各々の鋳型外枠から製作された青銅器の器種を推定することが可能になった⁽²⁾。また、滋賀県や兵庫県からも、類似する資料が徐々に増加している⁽³⁾。そこで、これらの資料を参考にして、吉崎・次場遺跡出土資料を再検討したところ、形態、製作技法、胎土ともに良く似ていることが明らかになった。

そのため、唐古・鍵遺跡の発掘調査を担当した藤田三郎氏や、銅鐸研究などで著名な春成秀爾氏にこの資料を鑑定してもらった結果、銅鐸の土製鋳型外枠である可能性が高いという回答をいただいた。

この資料報告では、吉崎・次場遺跡から出土した土製鋳型外枠について、その形態的特徴を中心に概説を行う。また、「県内でも青銅器製作が行われていた。」という視点にたち、県内の資料を俯瞰したときに、他にも青銅器生産に関わる資料が認められることが明らかとなった。そのため、それらの資料についても概説を行い、極めて少ない資料であるが、県内における弥生時代の青銅器生産の様相について仮説を提示したいと思う。

吉崎・次場遺跡出土の土製鋳型外枠について

吉崎・次場遺跡は、羽咋市吉崎町、次場町、鶴多町にまたがって所在し、標高2m前後の自然堤防上に立地する。遺跡は古邑知潟の南岸に接しており、古代交通の要所として捉えられる。

これまで通算17次におよぶ発掘調査の結果、口能登地域の拠点集落として認識されている。

この遺跡では、6点の土製鋳型外枠片を確認した。第2図1～5は、昭和59年度に石川県立埋蔵文化財センターが実施した、第10次発掘調査で出土したもので、同図6は昭和54年度に羽咋市教育委員会が実施した、第5次発掘調査で出土したものである。

5点の土製鋳型外枠が出土したW地区は、遺跡の北縁部にあたり、集落の立地する微高地の端部から、古邑知潟縁辺部低湿地への移行地帯



第1図 吉崎・次場遺跡位置図 (S=1/25,000)

に位置する調査区である。発掘調査は幅8m、延長107m、面積856m²の範囲で実施されている。土製鋳型外枠は、地表下約1mに認められる青灰色砂層中に形成された、厚さ10cm前後の遺物包含層から出土している。包含層中には、弥生時代中期～平安時代に至る遺物が混在している⁽⁴⁾。

第2図1は、W地区 - 4グリッドの包含層から出土した。不明土製品として報告書に掲載されているものである。残存長13.9cm、残存幅10.0cm、最大厚2.2cmを測る。側面には挟り込みによって把手が作り出されている。外面はヘラケズリの後、丁寧なナデ調整を行う。内面は縦方向に粗いヘラケズリを行う。器面の剥離・磨耗が著しい。断面形態には緩やかな湾曲が認められる。胎土は石英・長石風化礫・チャート・雲母などを多量に含む。他の出土資料も同様の胎土を用いている。側面には鋳造に関連すると思われる付着物が認められる（第2図トーン箇所）。

2は、W地区 - 3グリッドの包含層から出土した。残存長8.6cm、最大幅13.1cm、最大厚2.6cmを測る。外面は器面の剥離が著しい。側面には挟り込みの把手が作り出されている。断面形態には緩やかな湾曲が認められる。両側面が遺存していることから、鋳型外枠は組み合わせ式のものと同様と推測できる。

3は、W地区 - 4グリッドの包含層から出土した。残存長12.1cm、残存幅9.2cm、最大厚3.1cmを測る。外面はヘラケズリの後、丁寧なナデ調整を行う。内面は著しく剥離しているが、縦方向の粗いヘラケズリが確認できる。側面は縦方向のヘラケズリを行う。断面形態には緩やかな湾曲が認められる。

4は、W地区 - 4グリッドの包含層から出土した。残存長8.5cm、残存幅7.5cm、最大厚2.5cmを測る。外面は器面の剥離が著しい。側面には挟り込みの把手が認められる。内面は左下がりの斜め方向の粗いヘラケズリが行われている。断面形態には緩やかな湾曲が認められる。

5は、W地区 - 6・7グリッド東半分の包含層から出土した。残存長6.6cm、残存幅7.2cm、最大厚3.4cmを測る。外面はヘラケズリの後、丁寧なナデ調整を行う。内面は縦方向の粗いヘラケズリを行う。側面は縦方向のヘラケズリを行う。断面形態には緩やかな湾曲が認められる。

6は、16土坑上面の包含層から出土した。残存長10.0cm、残存幅9.0cm、最大厚3.5cmを測る。底面は平坦で、上面は中央が盛り上がる形態を呈する。底面はヘラケズリの後、ナデ調整を行う。上面は刷毛目調整の後、無数の指頭圧痕を施す。これは真土^{まね}のつきを良くするためのものと考えられる。

吉崎・次場遺跡出土の土製鋳型外枠は、身部に認められる緩やかな湾曲、挟り込みの把手の存在、内面の粗いヘラケズリ、法量などから、大型の銅鐸を製作するための鋳型外枠である可能性が高い。すべての資料が、各時期に属する大量の土器が混在した包含層からの出土であるため、明確な時期の把握は困難である。類似資料の帰属時期などから弥生時代中期末～後期前半頃に属する可能性が高い。

県内出土の青銅器鋳造関連資料

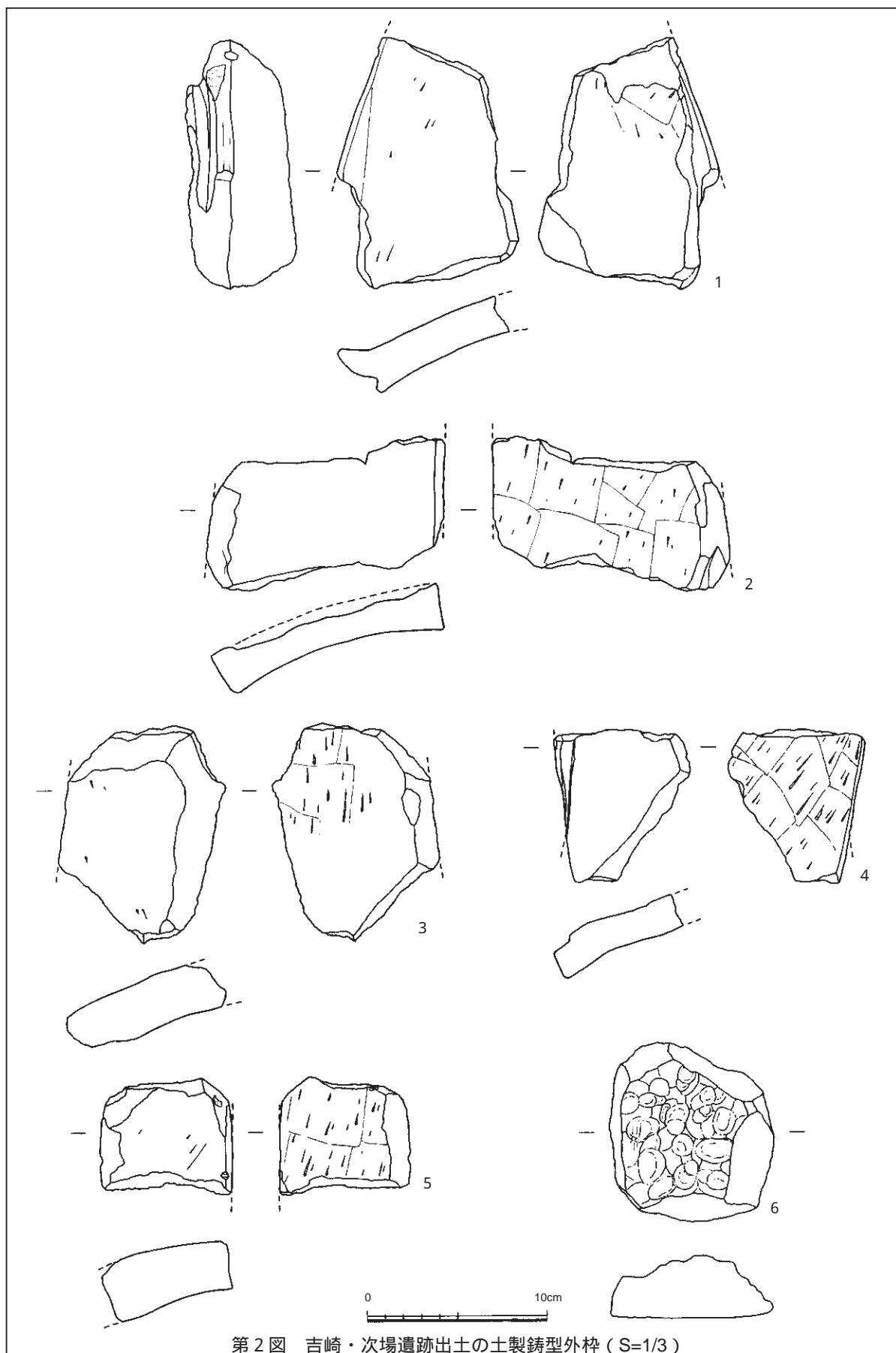
県内における弥生時代の青銅器生産に関連する資料は、吉崎・次場遺跡出土資料を除いて、2遺跡3例確認できた（第3図、第1表参照）。以下で各資料について概説を行う。

〔金沢市大友西遺跡出土の連鑄式銅鐸⁽⁵⁾〕

平基有茎式の二連式銅鐸である。大溝から出土しており、時期は弥生時代後期後半～終末期（法仏～月影 式）に比定できる。表面には緑青の付着が認められるが、地金の残りは比較的良い。鐸身部中央には鑄状の隆起帯をもつ。断面からは鑄ズレが生じていることが確認できる。上下端に切断された痕跡が残ることから、製作時には、四連以上のものであったことがわかる。

〔金沢市大友西遺跡出土の^{とりべ}取瓶？〕

有段高杯の杯部両面に鉾滓状のものが付着したものである。布堀建物跡（SB11）の柱穴から出土している。小片のため詳細な時期については不明であるが、後期後半以降に属するものと考えられる。



器面には、強い被熱により無数の気泡が生じており、重さも非常に軽くなっている。取瓶として使用されたものである可能性が高い。同様の特徴を持つ土器片は、周辺の包含層からも出土している。

〔宇ノ気町鉢伏・茶白山遺跡出土の銅塊⁽⁶⁾〕

第1号竪穴住居跡（新）の床面に認められる焼土周辺から出土している。時期は弥生時代終末期に比定できる。銅塊は大人の親指大の大きさと、重さは24.047gを測る。表面には緑青の付着が認められる。竪穴住居内で鑄造作業が行われた可能性が高い。

これらの鑄造関連資料は、弥生時代後期後半～終末期の北加賀地域に集中する傾向が認められる。生産された製品は、大友西遺跡出土の連鑄式銅鏃から、銅鏃などの青銅利器である可能性が高い。

県内で出土した弥生時代の青銅器および関連資料について

県内で出土した弥生時代の青銅器は、16遺跡33例確認できる⁽⁷⁾。金沢市藤江B遺跡からは銅剣が出土している。身上部4分の1ほどの破片で、鋒は欠失している。有樋式の中細形銅剣と考えられ、脊にはやや不明瞭ながら鑄が認められる。この遺跡からは小銅鐸も出土している。銅鏃は8遺跡20例確認できる⁽⁸⁾。銅鏡は9遺跡10例確認できる⁽⁹⁾。舶載鏡は吉崎・次場遺跡と金沢市無量寺B遺跡から出土している。ともに破片を再利用した懸垂鏡である。前者は岡村秀典氏の漢鏡編年4期（前1世紀後半～後1世紀初め）、後者は同編年の6期（2世紀前半）に位置づけられる⁽¹⁰⁾。その他の資料はすべて小型仿製鏡である。時期は弥生時代終末期～古墳時代前期に集中している。

まとめると、県内から出土した青銅器の分布は、北加賀地域と羽咋市域の2地域に集中することが明らかであり、特に金沢市域に著しい集中が認められる（第3図参照）。時期は、弥生時代中期後半から出土が認められ、後期後半～終末期に出土量が増加する。

青銅器関連資料としては、銅鐸形土製品と銅剣形磨製石剣があげられる。前者は2遺跡2例⁽¹¹⁾、後者は1遺跡1例⁽¹²⁾確認できる。地域の拠点集落のみに認められ、時期は弥生時代中期に限られる。

県内における弥生時代の青銅器生産の様相について

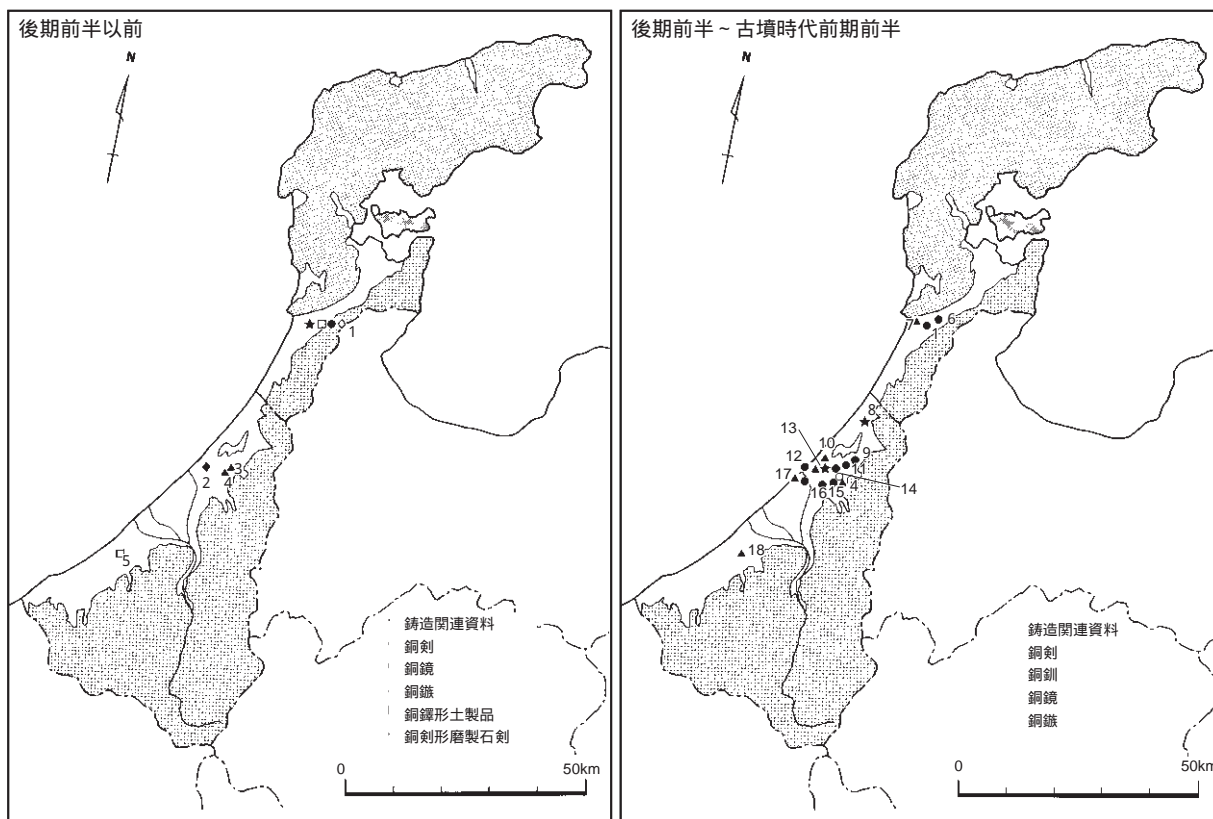
以上の資料をもとにして、県内における弥生時代の青銅器生産の様相について仮説を提示したい。

県内における青銅器生産は、吉崎・次場遺跡から出土した土製鑄型外枠の存在から、後期前半までに開始されていた可能性が高い。生産された製品は、銅鐸など集落内祭祀に用いられたものと考えられる。地理的な分布については、鑄造関連資料、舶載青銅器、青銅器関連資料は、地域の拠点集落に集中して出土するが、その他の青銅器製品は金沢市域に集中して出土する。

後期後半～終末期には鑄造関連資料の増加が認められる。小地域の中核集落と考えられる大友西遺跡⁽¹³⁾や、高地性集落と考えられる鉢伏・茶白山遺跡など、多様な集落から鑄造関連資料が出土している。生産された製品は青銅利器などが推定できる⁽¹⁴⁾。青銅器製品についても、量の多寡はあるが、さまざまな集落から出土しており、拠点集落に集中するという状況は認められない。地域的な分布については、金沢市域および羽咋市域に集中して出土する。後期前半以前とは異なり、生産遺跡の周辺に製品出土遺跡が分布しており、製品が生産遺跡から周辺遺跡に流通していたことを推定できる。

以上のように、県内における青銅器生産の様相は、その開始期である中期後半～後期初頭（段階）と、青銅祭器から青銅利器への転換が行われる後期後半（段階）の2時期に画期が認められる。

これらの画期は、集落遺跡の消長や、鉄製品とその製作技術における画期とほぼ一致する⁽¹⁵⁾。すなわち、青銅器や鉄製品とその製作技術における画期は、連動して生じており、この地域の社会構造変化に大きな影響を与えていた可能性が高い。しかしながら、鑄造関連資料および青銅器が集中して出



第3図 銅鑄関連資料および青銅器出土遺跡分布図

第1表 銅鑄関連資料および青銅器出土遺跡一覧表

番号	名称	遺跡名	所在地	出土遺跡	時期	備考
1	土製鑄型外枠	吉崎・次場遺跡	羽咋市吉崎町・次場町・鶴多町	W地区包含層	後期前半	
13	連鑄型銅鑄トリベ	大友西遺跡	金沢市戸水町・大友町	SD03(大溝)	後期後半～終末期	
8	銅塊	鉢伏・茶臼山遺跡	宇ノ気町鉢伏	SB11(布堀建物)ビット2ほか	後期後半～終末期	有段高杯転用
2	銅剣	藤江B遺跡	金沢市藤江北	第1号竪穴住居跡(新)	終末期	床面に焼土
14	銅釧	南新保C遺跡	金沢市南新保町	河道1	中期末～後期前半	中細形
2	小銅鐻	藤江B遺跡	金沢市藤江北	2号墳周溝	後期後半?	有銅鉤釧か?
6	銅鏡	四柳白山下遺跡	羽咋市四柳町	1号大溝	後期?	
1	銅鏡	吉崎・次場遺跡	羽咋市吉崎町・次場町・鶴多町	F地区第 面包含層	終末期～古墳時代前期初頭	破面研磨
9	銅鏡	塚崎遺跡	金沢市塚崎町	V-8号土坑上面	後期前半?	懸垂鏡、四咫文鏡
11	銅鏡	田中A遺跡	金沢市田中町	包含層	後期後半～終末期?	内行花文鏡
12	銅鏡	無量寺B遺跡	金沢市無量寺町	第6号竪穴住居跡	終末期	
13	銅鏡	大友西遺跡	金沢市大友町	包含層	古墳時代前期前半	背面朱付着、重圈文鏡
4	銅鏡	西念・南新保遺跡	金沢市西念町・南新保町	B 区1号溝	古墳時代前期初頭	懸垂鏡、双頭龍文鏡
15	銅鏡	古府クルビ遺跡	金沢市古府町	P区SD22	後期後半～終末期?	
16	銅鏡	下安原遺跡	金沢市下安原町	包含層	古墳時代前期初頭	重圈文鏡
3	銅鏡	磯部運動公園遺跡	金沢市磯部町	溝B上層	古墳時代前期	破面研磨、内行花文鏡か?
4	銅鏡	西念・南新保遺跡	金沢市西念町・南新保町	2号溝	古墳時代前期	珠文鏡
7	銅鏡	寺家遺跡	羽咋市柳田町	K区1号方形周溝墓	中期後半	
10	銅鏡	近岡遺跡	金沢市近岡町	包含層	後期後半?	
12	銅鏡	無量寺B遺跡	金沢市量寺町	P7(ビット)	後期?	
4	銅鏡	西念・南新保遺跡	金沢市西念町・南新保町	C3号溝	終末期～古墳時代前期初頭	
17	銅鏡	下安原海岸遺跡	金沢市下安原町	B区落ち込み状遺構	後期後半～終末期	
18	銅鏡	漆町遺跡	小松市漆町・白江町	K区1号住居跡	後期後半	
1	銅鐻形土製品	吉崎・次場遺跡	羽咋市吉崎町・次場町・鶴多町	A区包含層	後期後半	
5	銅鐻形土製品	八日市地方遺跡	小松市日の出町	SD07	終末期	
1	銅釧形磨製石剣	吉崎・次場遺跡	羽咋市吉崎町・次場町・鶴多町	A区包含層	終末期	S45年石考研調査
				C区包含層	終末期	S45年石考研調査
					終末期	S46年県教委調査
					終末期	S46年県教委調査
				A-1、B-2区包含層	終末期	S47年県教委調査
				G-24区包含層	終末期	S48年県教委調査
				B-2区第4層	終末期	S62年県埋文センター調査
1	銅鐻形土製品	吉崎・次場遺跡	羽咋市吉崎町・次場町・鶴多町	包含層	後期	
5	銅鐻形土製品	八日市地方遺跡	小松市日の出町	包含層	後期	
1	銅釧形磨製石剣	吉崎・次場遺跡	羽咋市吉崎町・次場町・鶴多町	包含層	後期	
				I区4号溝	弥生時代中期中葉	片面を欠損
				包含層	弥生時代中期	第1次調査
				V-12号土坑脇	弥生時代中期中葉	有樋式

土する地域は、各時期を通じてほとんど変化が認められない。このことは、画期が技術系譜や素材伝達網などの変化によって生じるにも関わらず、地域内では既存の伝達網を用いていたためと考えられる⁽¹⁶⁾。

地域的には金沢市域の特異性があげられる。この地域は、段階において拠点集落以外の集落に青銅器製品が伝達されることや、段階に小型仿製鏡が多く認められるなど、他地域と青銅器伝達形態に相違が認められる。段階において小地域の中核集落が2.5～3 km間隔に点在していること⁽¹⁷⁾などから、この地域を拠点地域⁽¹⁸⁾として位置づけ得るものと考えられる。

附記

本稿をまとめるにあたり、土製鋳型外枠の認定については、藤田三郎、春成秀爾、吉田 広氏の御教示を得ました。鋳造関連資料の見学には、今井淳一、出越茂和、前田幸恵氏の御厚意を得ました。また、佐々木勝氏からは有益な助言を得ました。文末ながら記して御礼を申し上げます。

失礼ながら、文章中の敬称は省略させていただきました。

註

- (1) 福島正実ほか1988『吉崎・次場遺跡』第2分冊 石川県立埋蔵文化財センター、p160.第126図117。
- (2) 藤田三郎・豆谷和之ほか1997『唐古・鍵遺跡 第61次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要16 田原本町教育委員会。
- (3) 土製鋳型外枠の類例は、滋賀県野洲町下々塚遺跡、同県守山市服部遺跡、奈良県橿原市一町遺跡、兵庫県神戸市玉津田中遺跡で認められる〔三好孝一1993「近畿地方における青銅器生産の諸問題」『古文化談叢』第30集(中)九州古文化研究会〕。
- (4) 福島正実1987『吉崎・次場遺跡』第1分冊 石川県立埋蔵文化財センター、p24・37～56。
- (5) 前田幸恵1996「第1節 銅鏡類 b銅鏡」『武器・武具・馬具』石川県考古資料調査・集成事業報告書 石川考古学研究会、p25。
- (6) 米沢義光ほか1987『宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡』宇ノ気町教育委員会、p13・26・104。
- (7) 一部古墳時代前期初頭の資料も含んでいる。
- (8) 採集資料は集成から除いている。採集資料としては、高松町二ツ屋遺跡(1点)、内灘町大根布砂丘遺跡(1点)、同町西荒屋砂丘遺跡(1点)、金沢市粟ヶ崎地内(1点)、同市金石北遺跡(1点)、同市下安原海岸遺跡(1点)、小松市漆町遺跡(2点)があげられる〔前掲註(5)〕。
- (9) 楠 正勝1997「第1節 銅鏡」『祭祀具』石川県考古資料調査・集成事業報告書 石川考古学研究会。
- (10) 岡村秀典1986「B.中国の鏡」『弥生文化の研究』6 道具と技術 雄山閣出版。
- (11) 安 英樹1997「第3節 銅鐸形土製品」『祭祀具』石川県考古資料調査・集成事業報告書 石川考古学研究会。
- (12) 前掲註(1) p167。前掲註(4) p108.第138図369。
- (13) 楠 正勝1997『西念・南新保遺跡』金沢市教育委員会、p449。
- (14) 分布からは小型仿製鏡も製作されていた可能性を推測できる。
- (15) 林 大智1999「吉崎・次場遺跡出土の板状鉄斧について」『石川県埋蔵文化財情報』第2号 財団法人 石川県埋蔵文化財センター。
- (16) 終末(庄内併行)期における既存伝達網の存続は、外来系土器の様相からも確認できる。
〔安 英樹1999「北陸における土器交流拠点」『庄内式土器研究』庄内式土器研究会〕。
- (17) 前掲註(13) p449。
- (18) 酒井龍一1997「第5章 拠点集落と弥生社会」『弥生の世界』歴史発掘6 講談社。